

## 浅野史郎さん 対談 堀田力さん

### 「明るく、前へ歩む」ために～ 共感を育み、関係を生み出す寄付

障がいを持った人たちが明るく暮らせる地域とは、  
そうでない生活者にとっても住みよい場所であることは間違いない。

AJOSC では障がい者支援活動に取り組む団体への助成や、  
都府県方面遊協・支部組合・組合員ホールの優れた社会貢献活動を顕彰している。

障がい福祉のフロントランナーとして走ってこられた

浅野史郎さんをゲストにお迎えし、堀田力会長が、

これまでの歩みや人生観をまじえてお話をうかがった。

#### ライフワークとして 障がい福祉に取り組む

**堀田** 浅野さんは宮城県知事をやられる前は、旧厚生省で熱心に障がい福祉のお仕事に取り組んでいらっしゃいましたね。

**浅野** 厚生省の障害福祉課長として仕事をしたのは、実は1年9ヵ月と短いのですが、その前任地の北海道庁で初めて障がい福祉の仕事に出合い、そこから障がい福祉は、私にとってのライフワークとなりました。

**堀田** その課長時代にグループホームを導入されるなど、それまでの面倒を見る福祉から自立するための福祉へと大きく舵を切られました。

**浅野** 短い期間でしたが、目指すべき方向性ははっきりしていたので、新しい施策をどんどん打ち出しました。課長というポストは、実際に仕事ができるポジション。これが局長や課長補佐では、なかなかそうはいかない。そのポジションで障がい福祉の仕事に関わることができたのは、私にとってはラッキーでした。

**堀田** 障がい福祉のお仕事に出合われて、浅野さんご自身がそれまでと変わったということもありますか。

**浅野** 自分のアイデンティティというのが、かなり変わりました。障がいを持った本人だったり、親御さんだったり、施設の人だったり、ボランティアの人だったり、そういう人たちと一緒にスクラムを組んで障がい福祉の仕事をする、そのなかでの私のポジションは、たまたま霞が関の役人であるという感じになりました。それまでは厚生省の

官僚であるということがまず先にありました。

**堀田** みんなの力を合わせなければ、障がい福祉の仕事はうまくいかないことは間違いありません。

**浅野** スクラムを組んでということは、実は敵と戦っているというイメージなのです。その敵は何かと言えば、世の中の無知、無理解であり、それを仲間と一緒に打ち破っていくというイメージで仕事をしていました。だから楽しかったですよ。

#### 非専門家巻き込むことで その地域は住みやすくなる

**堀田** 障がい福祉に取り組むうえで、何を活動の原点や目指すべき目標にしたのですか。

**浅野** 結局、障がい者本人が幸せを感じられるようにするためには、どうしたらいいかということです。知的障がい者や重度心身障がい者にとっては、「普通で場所、普通に暮らす」ことが願いなのです。普通で場所とは、つまり地域ということですが、私は地域というものを「海」にたとえました。普通の人には海で簡単に海水浴ができますが、知的障がいを持った方々は海に入ったら溺れてしまう。そこで、ボートや浮き輪やライフセーバーのような人を準備することで、その人たちが海水浴を楽しめるような海に変えることが、まずは私の仕事だと思いました。

**堀田** そうした地域づくりには、ボランティアの存在が欠かせません。障がいを持った方々が地域に出ていくことによって、地域の人たちの見方も変

わってくる。心ある人であれば、何か手助けができないかと、自然なボランティアの心が芽生える。

**浅野** 私は最近、ボランティアという言葉を使っていません。「非専門家」と言っています。ボランティアというのは、無償でやる、任意でやるということはある程度、半分以上、専門家だと思っています。障がい福祉に、非専門家である一般の人々を巻き込みたい。それまで10人だった非専門家が20人になれば、その地域は誰にとっても2倍住みやすくなる。そういう地域が全国にできてくれば、国が変わる。ですから、障がい福祉は地域づくりであり、国づくりだと、いまは思っています。

**堀田** 宮城県知事時代には、「みやぎ知的障害者施設解体宣言」を出されました。実にフレッシュな施策で、インパクトがありました。

**浅野** あれは北海道庁時代から考えていたことですが、本来、知的障がい者施設というのは、知的障がい者が地域に出ていったときに、そのサポートや支えのために使われるべきものであって、そこに一度入所したら、亡くなるまで出られないところであってはいけないと思いました。あの宣言は全部、自分の言葉で書いたのですが、目指すべき方向を示すためのものです。みんなでこの船に乗って、あの島を目指せ、その島に書いてあることが「施設解体」であり、「地域での支え」である、と。もちろん簡単に、明日、島に着くことはできない。そこまでの荒波をくり抜いていくことが、障がい福祉の仕事であるという思いを込めました。

**運命を受け入れることは諦めではなくて強い意志**

**堀田** 浅野さんご自身の人生計画として、知事の後でこれをやるというものはあったのですか。

**浅野** これは私の人生観のようなものですが、いまも私には人生計画というものはありません。これを「行き当たりばったりの人生」と呼んでいますが、決していい加減ということではなく、自分がどういう人生を歩むかは運命であり、運命というのは自分で選ぶものではなく、向こうからやって来るものです。その運命に身をゆだねて、寄り添っていこうというのが私の人生観です。で

すから、私には夢もない。

**堀田** 次の行き当たりばったりが、慶応大学の先生ということですか。

**浅野** はい。人生のなかで、一度は教えるということをやってみたいという思いはありました。教えがいのある学生たちばかりで、私にとってはとてもよい経験になりました。

**堀田** ライフワークである障がい福祉については、大学で何か授業を持たれていたのですか。

**浅野** ゼミで障がい福祉の研究をやりました。卒業後、福祉関係に進む学生はゼロですが、それはかまわない。でも、どんな職場に行ったとしても、必

ず障がい福祉の問題に直面するときがあります。そのときに、その会社や組織のなかで、誰よりも障がい福祉について理解し、その解決に力を発揮することができる人間になってほしい。そういう戦士として、私はキミたちを社会に送り出すと、いつもゼミの学生たちには言っていました。

**堀田** 慶応大学で教えていらっしゃるときに、ご病気になられた。いろいろ大変だったと思いますが、浅野さんの行き当たりばったりの人生観に、病気は何か影響を与えましたか。

**浅野** 「成人T細胞白血病」という白血病の一種でしたが、まったく自覚症状はなし。入院の前日まで授業をしていましたし、2ヵ月前には東京マラソンを完走しています。でも、発症しているということは告知されていました。病気になったことも、やはり運命として捉えました。でも、それは諦めとは違い、むしろ強い意志なのです。ですから、妻に「俺はこの病気と闘う。そして必ず勝つ。だから俺を支えてくれ」と言った瞬間から、パッと気持ちが晴れて、もう病気と闘うという意志しかなかった。それで絶望感に襲われたり、あせったりすることなく、精神的な安定性を保って闘病することができました。先ほど夢はないといいましたが、それがかえって私にとってはよかったと思っています。

**堀田** 闘病中に気持ちが揺るがなかったのも、それを運命として受け入れ、それを避けずにしっかりと向き合うことができたからでしょうね。

**浅野** そこから、「足下に泉あり」とい

うゲーテの言葉を好んで使うようになりました。かつては組織人の処世訓として使っていたこともあります。病気になってみたら、いまやることは病気と闘うことだけだと思えたのです。その意味で、足下に泉あり、です。

**堀田** 私は浅野さんと正反対で、何かに署名を求められると、「夢」と書いてしまうほうです(笑)。でも、それもよく考えてみると似たようなもので、いまのことを一生懸命やらなくては、夢は達成できない。

**浅野** 成人T細胞白血病の患者さんの団体の代表の人から、「浅野さんに同じ病気になってもらってよかった」と直接、言われました。テレビにも出て活躍している人が同じ病気になった。しかも、それが治って、再びテレビに出て活躍している。それを見て、「多くの人が勇気をもらった」と。僕が元気であること自体が勇気を与えているということで、うれしく思います。病気になったから言うわけではありませんが、それによって新たなミッションをいただいたという気がしています。

**堀田** 浅野さんの存在そのものが、ボランティアという感じですね。お会いするたびに、肌の色が力強くなってきています。

**寄付をすることで関係や共感が生まれる**

**堀田** 浅野さんは、日本フィランソピー協会の会長というお立場でもいらっしゃいますが、フィランソピーやボランティアについては、どう考えていらっしゃいますか。

**浅野** フィランソピーに関しては当初、企業の社会的貢献、社会的存在としての企業という問題意識で捉えていました。ただ、これも大きな観点から言うと、社会づくりであり、地域づくりであり、国づくりの一環だと思います。ボランティアについては、たとえば私の病気の例で言えば、私は骨髄移植を受けていますが、ドナー(提供者)さんになることは究極のボランティアと言えます。しかも、これはコーディネーターの方から聞いたことですが、ドナーさんは骨髄液を採られた後で、「ありがとうございました」と言うそうです。つまり、ボランティアをやらせてもらってあ

りがとうということなのですが、これはすごいことです。

**堀田** そうおっしゃる方が増えてきています。以前は、寄付させていただいてありがたいというのは、何か欧米人をきどっているみたいで抵抗感もあったようですが、このごろは子どもたちなどにしても、「ボランティアをさせてもらってありがとう。自分が成長できました」と、すごく素直に言ってくれます。日本にも本物のボランティアが増えてきたなという感じを受けています。

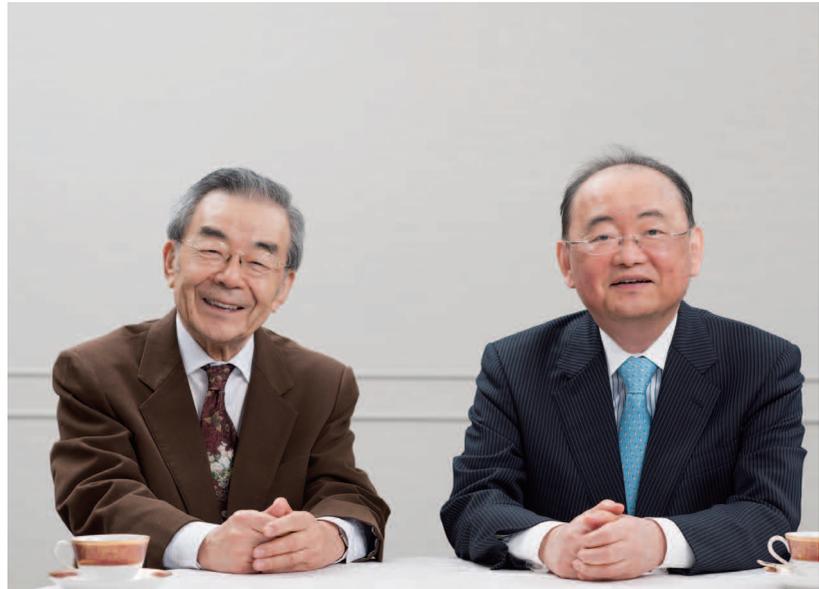
**浅野** 寄付は、寄付する側と寄付される側に関係性のようなものが生じることに意味があるのだと思います。も

**浅野史郎(あさの・しろう)** 1948年生まれ、宮城県出身。東京大学法学部卒業後、厚生省に入省。85年に北海道庁福祉課長、87年に厚生省障害福祉課長。93年に厚生省を退職し、宮城県知事選挙で当選。3期12年、知事を務める。知事退任後は、公益社団法人日本フィランソピー協会会長(2005年5月～)、慶応義塾大学総合政策学部教授(06年4月～13年3月)などを務める。現在、神奈川大学特別招聘教授。「豊かな福祉社会への助走」「許される嘘、許されない嘘」など著書多数。趣味はジョギング。



もちろん、寄付そのものはありがたいことですが、寄付という行為を通じて、される側の置かれている状況や生活ぶりというものに、いやがうえにも関心を持つことになります。それが大きいと思し、そういう寄付であってほしいと思います。そうするとおのずから、寄付の仕方、受け方に工夫のようなものが必要になるのではないかと思います。

**堀田** 私も寄付をいただいたり、自分でも寄付したりしていますが、やはり大切なことは「共感」だと思います。寄付することによって、相手のことを自分のこととして共感が持てるというのは、うれしいことです。また、いまはNPOなどの団体に対する寄付もありますが、税金をもらって活動するのと、寄付をもらって活動するのは全然違うことです。非営利の活動が寄付に支えられることで、自由に、制約なしに、それぞれの志のままに活動できる。そうした社会的な機能が寄付にはあると思います。それゆえ寄付を受けた側は、寄付金はこういう形で使われています、あなた方のお気持ちはこのような形で生かされていますということを、寄付し



てくださった側にフィードバックする必要があると思います。

**浅野** 東日本大震災では、全日本社会貢献団体機構や全日本遊技事業協同組合連合会などの遊技業界は復旧や復興のために被災地に多額の寄付をしたとうかがっています。

**堀田** はい。義援金や物品の寄付だけでなく、瓦礫の片付けや炊き出しなどにボランティアとして参加している方も多くいます。

**浅野** 私は宮城県出身で、前知事であるにもかかわらず、まだ被災地に一歩も足を踏み入れていないことに非常

に忸怩たる思いを感じています。これは、まだ免疫力が低いので、いまは行くべきではないと主治医から固く止められているからです。復興について言えば、これまた自分の病氣とシンクロさせるようですが、必ず治る、必ず復興すると信じています。しかも復興は、単に元に戻るのではなく、さらに新しい価値を創造することです。大変な災害ではありましたが、起き上がるときに何かをつかんで起き上がってほしいという期待、希望を持っています。

【対談実施日：2013年2月13日】



企業の社会貢献活動を顕彰する「企業フィランソロピー大賞」



会員企業のCSR・社会貢献担当者を対象とした勉強会「Stone Soup Club」

**公益社団法人  
日本フィランソロピー協会**

1963年に設立。企業の社会貢献活動のコンサルテーションや企業とNPOのマッチング、従業員など個人の寄付・ボランティア推進活動の促進を目指している。フィランソロピーとはギリシャ語のフィラン（愛）とアンソロポス（人類）を語源とする合成語で、直訳すると人類愛、慈善だが、「社会貢献」の意味で使われている。

<http://www.philanthropy.or.jp>